

対馬研修旅行の記

六月十日—十一日（一泊二日）

参加者 二〇名

対馬旅行感想

米水津村 高橋 徹

飛行機という乗物は、まだ私には稀少な体験であるので、今度の旅行では期待が大きかった。だが乗って見ると下界の対象物は見えず雲中霧中を飛ば、三〇〇mとはどれくらいの高さか、全く夢中の時をアツという間に着陸したように思えた。一分間に一七二円を支払った勘定だが、密室中に居たようなもので、ガナなくて残念だった。然しフェリーで四時間かゝる所を四〇分間の速さだから、これで比べれば又経済性も異なる。だから対馬空港待合室にも多数の乗客が待っている。福岡行と長崎行と二路線もある。

相対的なこと感じたことともう一つある。

島の山々の峻嶮さは我が郷里の海岸を見ていけばあま

り感じなかったが、その高さに於て元越山や尺間山よりもズツと高い山々の重なりと思えた。この山中をゲリラ戦で抗戦すれば元寇軍を悩ませたのになアと、ヒリピン戦歴の陸軍少隊長は、小茂田浜迎撃戦で華と散った宗助国の武勇を惜しむ。

そうだ。この山々は昔から国防の最前線だった。万葉集の歌の中にも『防人に立ちし朝けの金門出に手放れ惜かなとで たはな



万松院（対馬藩主宗氏の菩提寺）

しみ泣きし児らはも』とある東国から来た防人の子孫が今居るかも知れぬ。三韓征伐、元寇、朝鮮征伐、日清日露戦などこの山々はそれを知っている。

毛利高政築城の清水山城跡のあることも佐伯人にとっては懐しい。

厳原の宿から朝の散歩で高麗門まで尋ねるに自衛隊の営門で敬礼まで受けて中に入って現在の防人たちは陸海空軍とも島内に駐屯していることを知った。

山々はまた石の文化を遠くは石器人の頃から残してい



石の屋根（椎根）

るのではないだろうか。近世から残っている石垣塀が然も街中の表通りに堂々として長く高く苔むしたのが続いているのには驚く。それに武家門構えが数多く、家老の家そのものが残って使っている。登校中の生徒にその場所をきいても「サア」というだけだったが特定の場所指定には困ったのだろうか。

石の文化の象徴は椎根地区の石屋根倉庫であろう。日本唯一とすれば、三トンの重さの石屋根を支える巨柱が老朽化しているのもあり、何とか補強できないものか。入村見学料を取って積立てたらいかがなものであろう。

厳原資料館の庭床にもこの平たい石を敷いていた。記念に若田硯を一個ハリコンで買った。まだ見なかった曲浦の海女や豆酸地区の娘姿のことや、なんだか後髪を引かれる想いがして対島を飛び去った。

早朝散策

佐伯市 平川 マサ

寝苦しいひと夜であった。それは、馴れない寝具や、少し汗ばむ程の部屋の温度のせいかも知れない。朝五時

半、清田先生のドアのノックで起き出してみると、「町を歩こう」というおさそいに、そそくさと着替えて、同室の広吉さんと三人でホテルを出る。

早朝のすがすがしい空気が肌に少し寒く感じるのが心地よい。町の中はまだ車の動きも始まっていないが、ジヨギングする若者に出会い、どちらからともなく交わした「おはよう」の挨拶が、朝の風と共にさわやかだった。



石垣塀

此所巖原は宗家十萬石の城下町であり、あちらこちらに武家屋敷跡が残っており、特に目を引いたのは、町の中に沢山残っている石垣塀の芸術は見事なものである。それに部厚く

ついた苔にそっとふれると、やわらかな感触に永い年月が偲ばれる。この塀は、朝鮮の使節団の人々から、家中を覗かれないようにと配慮して造ったものだ、清田先生の説明がある。対馬は石の島、石の町といえるのかも知れない。

また、毛利高政公が築城したという清水城（今は城跡だけが残っている）もこの島にあり、尚のこと親近感さえわく島でもあった。朝食の時間に遅れないようにと歩き廻った二時間は、私にとっては貴重な「時」でもあった。

前日は時の記念日であった。帰りの飛行機の中で読んだ毎日新聞の『余録』の文中に、「デジタル時計の表示のように、目の前の瞬間だけに心を奪われてしまったのではないだろうか」という文が、印象的だった。

いつの日か、時を無視して旅をした夢でもみよう。

対馬旅行あれこれ

佐伯市 塩月 佐一

僅か半日の見学時間しかなかったが、収穫は大きかった。

た。『佐伯史談』百十一号の古藤田太氏の「対馬の歴史を訪ねて」との重複をさけて、余白を埋めたい。

告身

見学時間が少ないので、少しでも有意義な旅行をと思
って事前研究をしていると「告身」という聞きなれない
語に出会った。初めて出会う語に興がわいてあれこれ調

べてみる。

告身（早

田英夫

氏寄託）

室町時代

の中頃、倭

人早田彦三

郎等が、朝

鮮国より待

遇された官

職の辞令で、

朝鮮国玉の

捺印がある。

国指定重要文化財（歴史手帳六九号）

とある。更に日本国語大辞典には

告身 叙位の旨を記して、天子が被叙位者に交付する

文書・位記・辞令書。三代実録に……略

とあり、『街道をゆく』（司馬遼太郎著）には、これは
朝鮮王朝が、倭寇を取り鎮めてもらうために出した辞令
であろう……とある。早田氏は対馬水軍の将で宗氏の重
臣であった。

資料館の説明には簡単に「他にも同趣旨のもの二通あ
り、官位の授与を受けたもの対馬に十八人、壱岐に三人
筑前に五人あり」とある。

倭寇による朝鮮の被害は大きく、高麗朝衰滅の主要な
原因にもなり、一三九二年、李成桂が李朝朝鮮をたてる
と、かれは倭寇の懐柔に腐身し、藩主や重臣に官職を与
え、毎年米豆二百石を与えたという。

町立民俗資料館で「告身」の実物を見て、その大きい
のに驚いた。半紙四枚分程あろうかと思われる大きさの
部厚い紙に、墨痕鮮かに書かれている。小さいものより
も大きい方が威厳があり、有難味を増すということだろ
うか、現代でも国の賞状類は大きいようだ。



万 関 橋

見学あれこれ

私達は万関橋―上見坂展望所―小茂田浜元寇古戦場―
椎根の石屋根―万松院―歴史民俗資料館と、対馬観光の
メインストリートを訪ねたが、どこにも一軒の土産品店
もなかった。本土の観光地はどこでも土産品店がひしめ
き合っているのに。島はまだ観光客が少ないのであろう。
福岡から五便もある飛行機の乗客はだんだん増している
という。私達の乗った六十人乗りの便は満員であった。
この素朴さはいままでつづくのだろうか。



武家屋敷の石だたみ
(打水のあとは特に美しい)

万関橋の景は西海橋によくにている。

上見坂展望所では、日本一の瀬谷せぼだにといわれる浅茅湾あそうの
島々の展望を楽しみにしていたが、濃霧が立ちこめて何
も見えなかった。ここに吉田絃二郎の「島の秋」の文学
碑があった。彼が対馬で軍隊生活を送った時の思い出を
もとにして書いた小説が「島の秋」である。私はもうす
っかり忘れていた絃二郎をなつかしく思い出した。若い
時に愛読した絃二郎の感傷的な叙情文、旅を愛して残し
た多くの紀行文のことなどを。

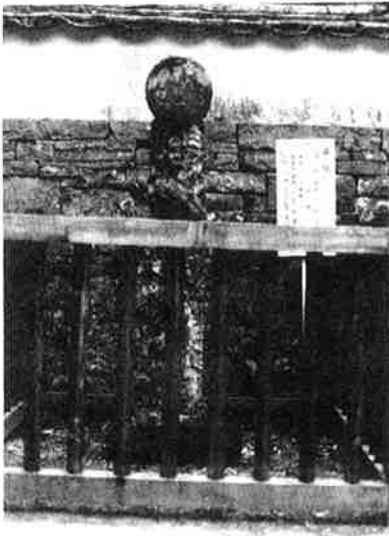
宗氏の菩提寺万松院の庭にある「諫鼓」かんこも珍らしかっ
た。高さ一米五十糎ぐらい、直径二五糎ぐらいあるうか
立派な彫刻をほどこした円い石柱の上に石の太鼓がつく
られている。石の芸術品である。殿様に諫言する時に打
ち鳴らしたという。封建領主がこんなことを許したのか
と思うと、大変愉快である。宗氏何代の名君がつくらせ
たものだろうか。

諫鼓：中国の伝説上の聖天子、堯・舜・禹がその施政
について諫言しようとする人民に打鳴らさせる
ために、朝廷の門外に設けたとされる鼓。いさ
めつづみ (日本国語大辞典)

とあり、更に『本朝文粹』の「三善清行」（平安前期の漢学者）の項に諫鼓のことがあるというから、日本にもこんな例があったのであろう。

町立歴史民俗資料館には、告身のほか、亀トきばくの遺品がある。これも他では見られない珍しいものである。亀トは主として亀の腹甲を火であぶり、その亀裂によってうらないをした。

延喜式（九六七）には、亀トを世襲的に扱うらうト部らべを対馬一〇名・壱岐五名・伊豆五名計三か国から二〇名徴せられたとある。



諫 鼓

資料館には対馬の珍しいものがいろいろあり、ゆっくり時間をかけて見たかったが、「時間がなから早く見てくれ」と館長に言われ、早々に引きあげた。「遠来の客に少しはゆっくり見せてくれてもよさそうなもの」と思いながら……。

町立資料館のすぐ前に、大きな県立歴史民俗資料館がある。

「あそこを見たいな」というと、

「あそこは観光コースに入っていません」とガイドの娘さんはすげない。残念だがあきらめる。

私は『街道をゆく』に書いてあった「壱岐の人は親切だが、対馬の人はどうも」という言葉を思い浮かべた。

（おわり）

